



色絵おしどり香合
仁清作 江戸時代中期
(挿図1)

大和文華館がいよいよ発足して、まず第一に着手した仕事は、将来美術館の核心となる美術品の収集でありました。それには種田社長を始め近鉄の首脳部から全幅の信頼と尊敬を受けておられた矢代幸雄先生に美術品収集を一任されたのです。

大正4年に東京帝国大学・文科大学の英吉利文学科を恩賜の銀時計を拝受するという、優秀な成績で卒業された矢代先生は、卒業後すぐ東京美術学校講師となり、初めは英語を、その後西洋美術史担当となり、長い間にわたって講壇に立たれました。先生の講義は内容が充実しているばかりでなく、頗る格調の高い、そしてユーモアに富んだ名講義でしたので、概して学科に余り興味をもたない学生の多かった美術学校でも、矢代教授の講義だけは次第に学生間で評判となり、必須課題とされている学生たちまで聴講にくるので、いつも先生の教室は学生で一杯だったそうです。

ところで大和文華館のために美術品を購入する責任者という新しい立場に立たされた矢代先生は全く未知の世界に飛び込む思いがされたそうです。当時のことを述懐して先生はしばしば私たちに次の

大和文華館の生立(その6)

おいたち

大和文華館館長 石澤正男

ような話をされたものでした。「自分ひとりの責任で作品を買うというのは、しかも自分のポケット・マネで買うなら別だが、公金で買うということになると、これは容易ならぬことで、かつて経験したことのない難問題にぶつかって弱ったもんだよ。長い間講壇に立って西洋美術史と後には東洋美術史の講義をしてきた僕ではあるが、講義に出てくる作品はみんな有名な傑作とか名品とかいわれているものばかりで、すでに定評のあるものだけだから、そういう作品については真偽の問題などは全く考える必要がなかった。ところが自分ひとりの責任で美術品を買うとなると、まず第一にその作品が真物かどうか、という点が重大な問題点になる。たとえそれが歴とした真物であっても、その売値が妥当であるか、どうかも問題となる。それは買物を始めたばかりの僕には判断のしようのない場合が多いので、その点は信用できる業者の言葉をそのまま信じ、自分は一切値切るようなことはしないことにした。よくしたもので、この人は決して値切ったりしない人だということを業者の方も了解してしまうと、決して不当な値段を吹っかけたりはしなくなるようだね。結

局はお互いの信頼感の問題だと思うよ。」

敗戦後の数年間は庶民が生活苦に喘いでいたばかりでなく、持てる階級にとっても苦難の多い時期で、大量の美術品が市場に流れ出てきました。重要な美術品と建造物等の海外流出を防ぐ法律としては当時は「国宝保存法」と「重要美術品等の保存に関する法律」の2つの法律があり、前者によるものには指定、後者によるものには認定という言葉が用いられていました。占領軍はこの2つの法律を尊重してくれたため、法を犯して海外に流出した国宝、重要美術品は極く少数に止りました。これは不幸中の幸というべきでしょう。このような時勢は美術品収集の立場からは前号にも書きましたように千載一遇の好機であったのです。

財団設立の認可された昭和21年5月からその年内に購入された美術品は総件数102件でした。それらの中から紙面の許す限り目星しいものを列挙してみることにします。

第一には、元享釋書・30巻の著者で知られる禪僧虎関師鍊(1278-1346)の墨蹟法語、続いて承和5年(838)に求法のため唐に渡った元興寺の僧豊安の弟子常暁が彼地より請来した図録、法具類を記述



五彩花鳥文小壺 明時代
大明万曆年製銘
(挿図2)

した常暁請来目録を挙げねばなりません。この2点は後になって重要文化財に指定されました。

日本陶磁では仁清(17世紀中葉)作色絵おしどり香合(近衛家伝来一挿図1参照)、木米(1767-1833)作黒地色絵瓜桃文鉢(金城精製の銘)などが目立つもので、中国陶磁では万曆赤絵として最も色彩の鮮麗な小壺(挿図2参照)や同じく万曆赤絵硯(赤星家旧蔵)は珍しい佳品であります。絵画ではまだ大物は入っていませんが、南北朝時代の子守明神像や、室町初期の多武峯曼茶羅図(藤原鎌足像)は稀少価値のあるものです。後に重要文化財に指定された鎌倉時代の刺繍騎獅文殊菩薩像がこの年に購入されています。この頃はインフレが急激に上昇中でした。読者の中には当時の市場価を知りたいと思われる方もあろうかと思えます。箇々の作品の価格をお知らせするわけにはゆきませんが、この約半年間に購入した美術品102件の総額は1,299,820円でした。今では前述の作品一箇でもこの総額に0をもう1つ加えても恐らく購入できないでしょう。(つづく・51・6・9)

季刊 美のたより No.36

昭和51年 6月30日

発行 大和文華館